心身障害学研究　Bull. Spec. Educ.
9(2)：31－38，1985

ドイツ Heilpädagogik 研究の我国への導入過程について

岡　田　英己子*・津　曲　裕　次

Heilpädagogik 史の研究動向をみると、学説紹介の理論史研究が大半を占める。Heilpädagogik の学的体系化の条件や、実践に関する歴史研究は極めて不十分である。このような従来の研究方法を検討する一助として、本稿では我国の Heilpädagogik 研究の基盤の形成過程をとり扱う。導入期に時期を限定し、その学的体系化を、①．研究の系譜、②．研究活動の組織化、③．実践への適用、の3条件を基に検討する。

Heilpädagogik 研究は、20世紀初頭に組織される児童研究活動の一環として成立した。が、その学的体系化は、ドイツ留学をした精神病学専攻者に負う所が多い。とはいえ明治期の Heilpädagogik 研究は、官学アカデミズムの系譜が強く、実践への取り組みは弱かった。かかる状況を踏まえて研究に着手したのが、富士川游と三田谷啓である。彼らの研究の系譜は、Heilpädagogik 研究の導入期から展開期に至るエポック・メーキングの役割を果たした。

キーワード： 治療教育学　　三田谷　啓　　富士川　游　　呉　秀三

Ⅰ．序

ドイツ Heilpädagogik 史の研究動向をみると、Heilpädagogik の概念・方法の変遷を、代表的論者の著作を基に論述したものがほとんどである。いわゆる Heilpädagogik 学説を検討する理論史研究が多い。しかし、Heilpädagogik の成立・展開過程の社会的・文化的条件に論及した研究や、実践現場への導入・定着化に関する歴史的研究は極めて不十分なままである。同様の傾向は、我国の Heilpädagogik 史研究にもみられる。Heilpädagogik の論者の文献の概要を紹介する形が大半を占める。

かかる従来の研究方法を再検討する第一段階として、Heilpädagogik が「学」として成立し、実践に適用されていく過程を把握することが重要である。それは、今日の治療教育学概念の輻輳性を明確化する Heilpädagogik 史研究への一助となりうると考える。具体的には Heilpädagogik の学的体系化と実践への適用を可能にした諸条件の分析が研究対象となる。即ち、隣接科学の発達、Heilpädagogik 研究者の登場と大学研究機関の確立、Heilpädagogik 研究の系譜と関連諸科学での学派の成立、学校教育・児童保護事業の発展に基づく Heilpädagogik の実践現場への適用、等の分析が研究の課題となる。[1)]

研究上の手順として、まずHeilpädagogikの学的体系化から考察する。Heilpädagogikが「学」として成立しうるには、当然その研究基盤を形成する条件が整っていなければならない。本稿では、次の3条件が必要であると考える。①．Heilpädagogik研究者の登場と大学研究機関の設置により、研究者養成が始まる。これが研究の系譜を形成する。ドイツ語圏では関連諸科学で学派が成立する。②．Heilpädagogik並びに関連諸科学の研究活動の組織化が行なわれる。それと並行して、専門誌の発刊がある。③．Heilpädagogikの「学」の性格上、当然実践的課題を持たねばならない。上記の2条件に基づく啓蒙活動が始まり、実践現場への普及・拡大化が試行される。

以下、我国における Heilpädagogik の研究基盤の形成過程を、3条件を中心に検討する。とりあえず導入期に限定し、その学的体系化の過程を明らかにしたい。その際、研究者の Heilpädagogik 研究の形成過程と、その研究の系譜が考察の核となる。特に導入期という時期設定から、研究者のドイツ留学前後の研究課題・成果に主眼を置くことにする。

Ⅱ．我国における Heilpädagogik の研究基盤の形成

（1）――児童研究活動を通して――

＊心身障害研究科

我国の Heilpädagogik 研究は、1890年代に始まり、1900年代初頭に組織される児童研究活動の一環として成立し、研究基盤を形成する契機を得たと位置づけられる。1890年代は欧米の研究の積極的導入によって、医学・心理学・教育学の各分野で、学的体系化が志向された時期である。そして、1890年代後半以降、これらの分野から、児童を固有の対象とする児童研究に携わる研究者が出てくる。いわゆる「翻訳紹介期」の児童研究が始まる。それは我国の学術研究体制の整備の進行期であり、Heilpädagogik にかかわる個別科学の講座・学科が、帝国大学・高等師範学校を核に設置されていく時期でもある。

1900年以降、公教育の普及に伴い学業成績不良児問題が顕在化する。かかる状況を反映して、教育的見地からの児童研究が漸次増加し、従来の「翻訳紹介期」を脱し、「体系的組織期」への移行期に入る。と同時に、急速な学術研究体制の整備と公教育の普及により、1910年代に入ると、児童研究の「特殊問題研究期」が並列的に生じてくる。[2)]

Heilpädagogik の研究基盤となる隣接科学の進展は、このような児童研究の「体系的組織期」、「特殊問題研究期」の始期にみられる。その研究動向で特筆すべきものとして、①. 1900年代における児童心理学の成立，と、②. 1910年前後に始まる実験教育学の導入，が挙げられる。

我国の児童心理学は、1900年頃から欧米の重要な児童心理学書が相次いで翻訳紹介され、1910年代にかけて、元良勇次郎、松本孝次郎、高島平三郎、塚本政次等により、学的体系化が試みられた。プライヤー（Preyer，W．T．）に始まるドイツ児童心理学の成果に基づくものが、かなりの比重を占めていた。とはいえ児童心理学の成果を踏まえた本格的な Heilpädagogik 研究は、ドイツ留学をした心理学専攻者が最初に着手したのではなかった。我国の場合、児童心理学に関しては、アメリカのホール（Hall，S．G）に始まる児童研究運動の影響が大きかったからである。[3)]

一方世紀転換期からの欧米の児童研究の動向は、児童精神の発達を記述するだけでなく、発達を規定する諸要因に注目するようになる。実験心理学と個人差研究の発展により、教育分野を対象とした研究、即ち実験教育学や教育心理学が成立する。ドイツでは、ライ（Lay，W．A．）やモイマン（Meumann，E．）が、実験心理学の実際的応用を目ざして実験教育学を提唱した。我国では、吉田熊次、乙竹岩造、小西重直らが、実験教育学を紹介している。[4)]

1900年代後半ヘルバルト派教育学への反省として、個性を重視した児童教育の必要性が盛んに論じられた。実験教育学の導入は、これに拍車を掛けた。やがて乙竹に典型的にみられるように、実験教育学を基に、素質の問題、即ち劣等児・低能児・不良児・優秀児の教育が取りあげられるようになり、学級編成や教授法の問題が論議された。1910年代の教育界には、実験教育学の影響の下に実験的科学的研究への志向が現われるようになった。[5)]

さて、研究活動の組織化は、研究体制の基盤を強固にするものであるが、児童研究活動の組織化は、1890年の日本教育研究会の創設に溯る。その研究組合として、1895年に児童研究組合ができるが、活動はまもなく中断する。だが、これを母胎として、やがて児童研究活動の核となる日本児童研究会が組織されるのである。1898年、元良勇次郎、高島平三郎、松本孝次郎、塚原政次により、我国最初の児童学専門誌「児童研究」が発刊された。以後同誌を中心に児童研究の専門分化が始まる。1902年、日本児童研究会が創設され、翌年1月から「児童研究」を機関誌とした。会長に元良勇次郎、幹事に高島平三郎、松本孝次郎、榊保三郎、下田次郎、評議員として三島通良、呉秀三、富士川游、その他がおり、医学関係者による児童研究が可能な体制を始めて有することになった。

1907年から富士川は幹事になり、「児童研究」誌の医学的分野を主に担当する。富士川は、同誌並びに日本児童研究会活動を通して、新しい学問である教育病理学・教育治療学を、積極的に提唱していく役割を担うことになる。

1907年7月以降、「児童研究」は個別分野毎に児童研究の動向を紹介するようになり、児童心理学、教育学、学校衛生等と共に、教育病理学・教育治療学が項目として取りあげられた。ここに、児童研究活動の一環としての Heilpädagogik の研究基盤が形成され始めたといえる。以後、明治末から大正にかけて児童研究全般の発展と専門分化に呼応しつつ、我国での Heilpädagogik の研究体制の構築が志向されるようになる。と同時に、大正期の児童保護事業の成立に伴って、より実践

的見地にたったHeilpädagogik研究が展開されるのである。[6)7)]

Ⅲ．我国におけるHeilpädagogikの研究基盤の形成

（２）――精神病学の確立を通して――

Heilpädagogik研究の導入期に、その学的体系化を支えた重要な隣接科学として、精神病学[8)]が挙げられる。ドイツ医学の積極的な摂取を計る時流の中で、医学者、殊に精神病学専攻者により、教育病理学として最初に紹介されたからである。

我国の精神病学の成立は、1886年、榊俶が帝国大学医科大学教授に就任し、精神病学教室を開いたことに始まる。以後、片山国嘉、呉秀三、三宅鉱一といった東京帝国大学医科大学精神病学講座での研究の系譜と、その臨床の場であった東京府巣鴨病院での医員達による精神病学研究とは、ドイツHeilpädagogikを基とした戦前の我国の精神薄弱医学研究の主流をなすものであった。

榊俶の渡独は、1882年である。クレペリン（Kraepelin，E．）の教科書『精神病学摘要』第１版が発刊される前年にあたる。1880年代のドイツ精神医学は、病院精神医学（施設精神医学）から大学精神医学への移行期に該当し、大学での精神医学教室の設置によって、90年代に始まる精神医学の発展の研究基盤が形成されつつあった。ドイツ精神医学の飛躍の契機となったのは、いわゆるクレペリン疾病分類体系が始めて示された1896年の教科書第５版が出版されたことによる。この頃から内因性精神病の研究に対する関心も深まり、ドイツ精神医学は急速に進展していく。[9)10)]

我国へのドイツHeilpädagogikの導入は、精神病学研究の成果が、留学生を通じて我国にもたらされる1900年代に始まる。この時期の紹介者としてはまず1898年から1900年にかけて、イエナにいた富士川游を挙げることができる。富士川は、イエナで同じ下宿にいた女子教育研究者の下田次郎から、「児童研究」誌を見せられ、この種の雑誌が我国にもあるのを知り、1900年、「学齢児童の色情に就きて」と題する論文を同誌に投稿する。その中で、ドイツHeilpädagogikの研究状況を伝え、我国の児童研究にも精神病学者や小児科学者が加わるべきであると述べている。そして、1899年に設立されたドイツの児童研究協会の趣意書を引用し、①．小児欠陥（Kinderfehler）の研究、と、②．精神病理学（神経病理学）に基づいて「漸次に科学的教育病理学を興すこと」が「児童研究家の一大事業として、まず着手すべきものなるべし」との結論を出している。[11)]

また同時期にオーストリア、ドイツに留学し、その間富士川と連絡をとっていた呉秀三も、Heilpädagogikに関心をもち、帰朝後その必要性を論文等で主張する。呉は1901年10月に帰朝し、直ちに医科大学教授となり精神病学講座を担当、10月末には片山国嘉に代わり東京府巣鴨病院医長に就任する。以来呉改革と称される病院内の改革が、ドイツ精神病院の運営理念に倣って行なわれる。呉が最初に取り組んだのは、無拘束制の推進である。それは必然的に患者処遇の改善及び治療等の進展をもたらし、その一環として、1909年院内児童、特に精神低格を対象とする小学校（修養学院）が設置され、教育的治療が始められた。[12)]

また呉は、1902年１月、『医海時報』に「癲狂院の設立は何か為に踟躕さるゝや」を発表したのを皮切りに、我国の精神病院の現状に鋭い批判を加える一方、欧州での研究成果を基に、精神病学講座の設置、精神病学を文部省指定学校必須科目にすること、癲狂院・白痴院・補助学校の設立、師範学校の教育病理学講師の増設、警察官や感化院・裁判所に属する医師への精神病学講習の実施、等の精神科医療上の先駆的な提言を行なっている。[13)]

1902年４月、呉は、医科大学内科の教授三浦謹之助と共に、日本神経学会を創設する。現在の日本精神神経学会の前身であり、これをもって我国の精神病学の研究活動の組織化がなされたといえる。その機関誌「神経学雑誌」は、発刊当時から教育病理学の項目を設け、Heilpädagogik研究に関する紹介にはかなり力を入れていた。例えば「神経学雑誌」の主幹である呉は、1902年３月の発刊の辞において、精神病・神経病学の新しい研究動向を踏まえた上で、教育病理学の必要性を次のように位置づけている。「…夫れ精神病と神経病と其関係する所甚だ広く、旁に吾人の身体健康を損ふのみにあらず。或は其権利と義務とに関連して法医学者の注意を惹起し、或は遺伝と変質とに関して衛生家を蹶走せしめ、其病的現象は心理学者の考覈に資し、精神薄弱は教育家に諭戒する所あり、為めに近時教育病理学の声漸く高きを聞く」[(14)]

1903年、帝国議会で医学校に精神病科設置を望む建議案が可決された。以来、精神病学講座が漸次増加する。我国での創成期の精神病学研究体制が、ようやく確立するのである。

1900年代に始まる我国への Heilpädagogik の導入は、かかる精神病学研究体制の確立を前提条件としている。当初は、ドイツに留学した医学者、教育学者達による教育病理学、治療教育学の翻訳紹介が主であったが、[15]やがてこれらの成果を基に Heilpädagogik の著書がまとめられ、学的体系化への志向を強める。その代表的研究としては、榊保三郎『異常児ノ病理及教育法、教育病理及治療学』（２巻、1909－1910年）と、富士川游・呉秀三・三宅鉱一『教育病理学』（1910年）が挙げられる。

だが、明治期に導入された Heilpädagogik は、シュトリュンペル（Strümpell，L．A．）の教育病理学と、コッホ（Koch，J．A．L．）の精神低格・精神薄弱の分類の紹介が主であった。それは、診断の前提としての児童欠陥に関する分類を中心とした類型論的記述に届まっていた。明治期の Heilpädagogik 研究者は、精神病学専攻者が多かった。殊に東京帝国大学医科大学精神病学教室を核とする官学アカデミズムの研究の系譜が濃厚であった。そのため教育病理学としての Heilpädagogik の理論化はともかく、その実際の適用に関する取り組みは弱かった。西欧精神医学は病院精神医学（施設精神医学）での実践から始まり、大学精神医学へと転化していく発展過程をたどっている。一方1880年代以降のドイツ精神医学の成果を摂取し、学的体系化を計った我国では、大学精神医学だけが正統な研究機関であった。ここに、我国の精神病学の成立過程での大学精神医学における実践的活動の欠落という傾向が生じた原因がある。[16]精神病学のかかる研究状況は、関連領域として併せて導入された Heilpädagogik にも、当然影響を及ぼしたと考えられる。

また、我国の場合、障害児のための学校教育制度や児童保護事業が不備であったことにも一因がある。当時「劣等児・低能児」の教育問題が顕在化し始めていたものの、Heilpädagogik を実践する場は極めて少なかったのである。このような歴史的・社会的制約から、ドイツ Heilpädagogik を踏襲しつつも、それとはニュアンスの異なる Heilpädagogik が学的体系化される条件が、明治末期には存在していたといえる。それは、Heilpädagogik の理論と実践という統一的課題が分断化されて導入されていた我国の状況を、問題として認識しうる契機でもあった。

Ⅳ．我国における Heilpädagogik 研究の系譜
——富士川游・三田谷啓——

理論として導入された Heilpädagogik を実践現場に適用していくには、当然実践的見地にたって Heilpädagogik を研究することが必要である。ここで取りあげる三田谷啓[17]と彼の師富士川游[18]の研究の系譜は、まさに明治末期において、実践に主眼を置いて Heilpädagogik に取り組もうとした典型であった。

富士川の Heilpädagogik 研究の特色は、児童研究活動との関連が密接なことにある。Ⅱで述べたように、1907年以降、富士川は「児童研究」誌を通して Heilpädagogik の啓蒙活動に着手するが、この時期は、富士川と三田谷による研究の系譜の最初の接点でもある。そこでまず三田谷が Heilpädagogik 研究を志し、体系的に学んでいく過程をみることによって、大正・昭和期に展開される富士川・三田谷の広範な治療教育・児童保護活動の原点を明らかにしたい。これによって、彼らの Heilpädagogik 研究の独自性の史的位置づけができるものと考える。三田谷の Heilpädagogik 研究の始期に該当する時期は1905年10月大阪府立高等医学校卒業後上京し、ドイツ留学を終えて帰国する1914年までである。

1905年10月上京した三田谷は、まもなく富士川の助手をしていた友人から富士川を紹介された。このことが一生の進路を決定した。富士川の世話により、彼の親友である呉秀三の下で「神経学雑誌」の編集を手伝うことになり、同年12月から巣鴨病院の事務所、即ち医科大学精神病学教室に通勤した。1901年高等師範学校研究科において、我国で始めて「教育病理学」の講義をした助教授榊保三郎が、京都帝国大学福岡医科大学に転出した直後の時期である。[19]1907年には三宅鉱一がドイツから帰朝し、講師に就任する。[20]当時巣鴨病院は呉改革の進行中であり、三田谷は編集の傍ら、臨床講義を聴いたり、呉の回診に加わったりしている。

1906年12月から１年間の軍隊生活を送り、その後富士川の助手として直接師事することになる。

この1907年12月から1911年5月渡独に至るまでの3年半の年月は、三田谷が専攻分野を決める重要な時期となった。三田谷が係わった人々や、従事した仕事は、当時の我国の Heilpädagogik 研究の動向を如実に反映していたからである。即ち「中外医事新報」、「国家医学会雑誌」、「児童研究」等の編集に携わる傍ら医科大学法医学教室の片山国嘉や三田定則から指導を受け、[21]元良勇次郎、高島平三郎らの知遇も得ている。その間富士川の教示により、精神病学か小児科学かという専攻上の迷いを払拭し、Heilpädagogik の研究を決心する。さらに、ドイツ留学の準備をするよう富士川から促され、やがて富士川の援助の下にそれを実現する。

富士川は、1900年イエナから帰朝して以来、大正年間を通じて医学問題の啓蒙活動のオピニオン・リーダーとして活躍した。三田谷は、富士川の活動が多岐にわたる明治末から大正期にかけて師事したのである。後年、雑誌「母と子」の出版や、母の会の組織化、講演等による母性保護・児童保護の啓蒙という活動形態は、富士川の助手としての仕事を通して培われたものといえよう。

さて留学に際して三田谷は、①. ドクター試験を済ませること,②. Heilpädagogik の理論と実際を学ぶこと,の2つの課題をもっていた。1912年6月、①の課題を終えた後、三田谷は文科にも籍を置き、児童心理や Heilpädagogik に関する講義をとり、Heilpädagogik 研究に集中し始める。また休暇を利用して、社会事業施設や治療教育施設・機関を頻繁に見学している。1913年4月、ゲッチンゲン大からミュンヘン大へ転じ、クレペリンの教室に入った。ビネー・シモンの知能検査をミュンヘン郊外の精神病院施設2ヵ所で実施し、報告している。

このようにして三田谷は、Heilpädagogik の成果を学ぶのであるが、では当時のドイツ Heilpädagogik はどのような歴史的・社会的条件の下に展開されていたのであろうか。そして留学中どのような影響の下に、三田谷の Heilpädagogik 研究の方向は形成されていったのであろうか。三田谷の留学の援助をした富士川自身は、1898年から1900年までドイツにいた。その目的は、内科学、特に神経病学と理学療法を学ぶことにあり、滞在費は中外医事新報社の原田貞吉から出ていた。これに対し、同じく中外医事新報社で編集に携わっていた三田谷は1911年から1914年にかけてドイツで研究している。

約10年余りの隔たりがあるが、この間、①. ヘラー（Heller, T.）に始まる Heilpädagogik の学的体系化、②. 公的児童保護事業の発展、③. 補助学校の普及、によって、治療教育施設・機関の多様化・拡充化が進展していた。留学に先だって三田谷は「児童研究」の編集に従事していたため、最新のドイツの児童研究の動向は十分把握していたはずである。がそれでも Heilpädagogik 関係の施設・機関を視察して回った三田谷の眼には、①.当時急速に制度的整備が進められていたドイツ児童保護事業の総合的体系化，と、②. 特殊児童のための児童保護施設・機関で専門的養護の処遇方法として Heilpädagogik の導入・定着化が行なわれていたこと，の2点は、極めて斬新的なものに映ったようである。[22]

V. 考　　察

富士川・三田谷の研究の系譜の独自性は、児童保護事業の活動の一環として、Heilpädagogik を位置づけていた点にある。では、これはどこに由来するものであろうか。1914年までの彼らの研究の独自性を形成した要因として、次の5点が考えられる。①. 富士川も三田谷も、従来の我国の Heilpädagogik 研究者のような官学アカデミズムの系譜ではなく、極めて実践志向が強く、かつ啓蒙活動のための資質も有していたこと。②. 呉秀三主幹の「神経学雑誌」の編集会議は、巣鴨病院の精神病学教室で行なわれており、三田谷は編集の手伝いを通して、呉改革の進行と精神病学の研究成果を知りうる恵まれた環境下にいたこと。また当時の精神病学教室は、医員の志願者が少なく教室や病院の運営に時には支障をきたす程で、三田谷にも多くの活動の機会が与えられたこと。[23] ③. 富士川と三田谷は、すでに1907年頃から治療教育院の設立構想をもっていた節があること。後に三田谷治療教育院のモデルとなったトリューパー治療教育院に、富士川自身、イエナ滞在中しばしば訪れ、さらに「児童研究」に何回もその報告をしている[24]点から考えて三田谷に治療教育院設立の課題を託して留学の援助をした可能性が強いこと。④. 三田谷が渡独した時期は、ドイツ Heilpädagogik の学的体系化の確立に伴って、特殊児童を対象とした児童保護施設・機関に Heil-

pädagogik の導入・定着化がみられること。⑤. 三田谷は、(i). 富士川、呉、元良、高島等の影響、殊に富士川に直接師事していた,[25](ii). 「神経学雑誌」、「児童研究」の編集に従事した，の２点から、留学前の時点で、すでに教育病理学に基づく狭義の Heilpädagogik でなく、児童研究の一環として広義に把握しえたこと。そのため Heilpädagogik の対象をドイツ児童保護事業体系に位置づけて考える研究基盤が形成されていたこと。

大正期に入り、我国ではようやく Heilpädagogik 研究の本格的な展開が始まる。が、富士川・三田谷に続いて実践的課題をもって研究に取り組もうとした人物、例えば川田貞次郎や杉田直樹らが現われてきたこの時期に、第１次大戦が勃発し、ドイツ留学生による研究の系譜は一時中断する。三田谷は辛くも戦争の直前に帰国したが、ミュンヘンのクレペリン教室にいた杉田は、留学を短縮している。後に杉田はアメリカに渡る。同じく川田も、ドイツでの Heilpädagogik 研究を望みつつも、戦争中のため1916年アメリカ留学に切りかえている。[26]

この中断期は、他方ではアメリカの児童研究運動を背景とする久保良英らの児童心理学研究を我国に定着させる促進力となった。それは、導入期を終え、我国の社会的・文化的条件に適合しうる Heilpädagogik 研究が始まる展開期へのエポックであったと位置づけられる。それ故、富士川・三田谷による1905年末から1914年までの研究の系譜は、 Heilpädagogik 研究の導入期から展開期に至るエポック・メーキングの役割を果たしたといえよう。

Ⅵ. 今後の研究課題

1914年帰朝後、三田谷は富士川と共に治療教育院設立に奔走する。が、資金面の問題や治療教育院への理解不足から、その設立は1927年まで待たねばならない。この間、三田谷が行なった知能検査法の改訂、児童相談、大阪市社会部児童課長時代の行政レベルでの児童保護事業、母親の啓蒙等は、いずれも治療教育院設立構想を核にして展開された活動であったと位置づけられる。一方、富士川も大正期に異常児童問題への関心を深め、施設児童の調査研究に取り組むようになる。[27]かかる点を解明することによって、大正から昭和初頭にかけて実践された富士川・三田谷の Heilpädagogik 研究の系譜の独自性を、より明確化できるものと考える。また我国での Heilpädagogik 研究の展開期となる第１次大戦以降に、ドイツに留学した人々による Heilpädagogik 研究とその実践についての検討も、本研究の継続として必要であろう。

(注)

1）本稿を基にして今後進める Heilpädagogik 史研究の視点を，次に簡単にまとめておく．
ドイツでは国家統一後，約20年に及ぶ不況期の中で階層分化が進行し，貧困児童・青少年非行・学業不振児問題が順次顕在化していった．やがて1890年代に入り，近代市民社会の基本的矛盾が露呈し，ゲマインシャフトに基づく社会再組織化が志向される時代思潮の下に，児童問題への政等的対応が，医学・教育・社会事業の各分野でとられるようになる．即ち，①. 医学、殊に精神医学，心理学，教育学の発達．②. 公教育の普及と補助学校の設立　③. 公的児童保護事業の成立，等の基底条件が並列的に生じてくる．これにより特殊児童問題への政等的関心が高まる．それは，対象としての「特殊児童・異常児童」を明確に把握しうる科学的理論が要請される契機となるのである．
Heilpädagogik の学的体系化は，1890年代以降であると考えられる．Heilpädagogik は，①. 「特殊児童」の理解のための理論の必要性，②. 実践現場に適用しうる治療教育法の要請，を成立根拠とし，関連諸科学の成果を吸収した一定の学問的水準の下で，その学的体系化を始める．そして世紀転換期から Heilpädagogik 理論を背景として，ドイツでは治療教育施設・機関の多様化がみられるのである．

2）渡辺徹（1953）：本邦心理学の歩み，心理学講座第１巻，中山書店，Ｐ．３－４．及び乾孝（1977）：児童心理学，新評論社，Ｐ．207―209.

3）波多野完治・依田新（1959）：児童心理学ハンドブック，金子書房，Ｐ．902－905. 及び心理科学研究会（1975）：児童心理学試論，三和書房，Ｐ．48－52.

4）吉田熊次（1908）：実験教育学の進歩，同文

館．乙竹宮造（1908）：実験教育学，目黒書店．及び小西重直（1908）：学校教育，博文館，等．実験教育学の導入過程に関しては，藤原善代蔵（1943）：明治大正昭和教育思想学説人物史，第二巻，東亜政経社，P．736－757．が参考になる．

5）伊藤仙太郎（1972）：わが国の義務教育における教育方法の歴史的研究，風間書房，P．88－91．

6）我国の児童研究活動の歴史については，1898年11月創刊号からの「児童研究」誌を参照．

7）Ⅱの記述全般にわたって，久保良英（1931）：児童心理学，藤井書店，P．505－538．を参照．

8）当時の精神医学の名称である．

9）榊俶時代の精神病学は，内村祐之（1940）：榊先生と東京帝国大学医学部精神病学教室の創立，精神神経学雑誌，44巻1号，P．63－79．が詳しい．

10）クレペリンの教科書の位置づけは，クレペリン，E．著，岡不二太郎・山鼻康弘訳（1977）：精神医学百年史，金剛出版，P．160－165．を参照．

11）富士川游（1900）：学齢児童の色情に就きて，児童研究，2巻9号，P．13－14．

12）巣鴨病院に関しては，杉田直樹編（1928）：呉教授在職二十五年記念文集，第三部，吐鳳堂，P．1－238．及び岡田靖雄（1981）：私説松沢病院史，岩崎学術出版，を，呉については，岡田靖雄（1982）：呉秀三，思文閣，を参考にした．

13）呉秀三（1905）：文部省指定学校規則を読む，医海時報，583・584号，他多数．

14）発刊の辞，神経学雑誌，1巻1号，P．2．

15）感化法制定の1900年，大村仁太郎『児童矯弊論』が出されている．ドイツ Heilpädagogik を教育学的立場から紹介した我国最初の治療教育学文献．

16）秋元波留夫・石川清（1966）：日本精神医学史，日本精神医学全書Ⅰ，総論，金原出版，P．3．

17）三田谷については，三田谷啓（1923）：社会事業所設置認可願，及び三田谷啓（1931）：山路越えて，の他に，三田谷啓日記（1911）を参照．

18）富士川については，富士川先生刊行会編（1954）：富士川游先生，及び富士川英郎編（1980－82）：富士川游著作集，1－10巻，思文閣，参照．

19）榊保三郎は榊俶の弟であり，1901年のこの講義に際し，富士川も助言をしている．榊保三郎（1910）：異常児ノ病理及教育法，教育病理及治療学，上巻，第二版，富山房・南江堂，P．3．

20）三宅が帰朝したのは，日露戦争後の犯罪者の増加が社会問題になっていた頃であった．かかる状況を踏まえて，三宅は精神病学研究を進めた．また精神病学への実験心理学の導入に寄与した．三宅については，金子準二（1963）：三宅鉱一博士事績，三宅鉱一博士事績編纂委員会，がある．

21）法医学教室は，1888年片山により設置された．明治期の法医学と精神病学は重複領域が多かった．

22）当時のドイツ児童保護事業に関しては，拙稿（1983）：ドイツ児童保護事業成立・発展期における Heilpädagogik の位置づけについて，筑波大学心身障害学研究科中間評価論文，を参照．

23）例えば，1906年の三田谷の入隊に際して，100円を前納する必要があったが，その窮状を察した呉は，教科書執筆の仕事を与え費用を出している．呉秀三（1907）：最新生理学及衛生学，富山房，が，それに該当すると思われる．．

24）富士川游(1908)：児童身体及精神状態検査記録，児童研究，12巻2・3・4・5号，及び富士川游（1909）：トリューペル氏教育院，児童研究，13巻1－4号，等．三田谷も，三田谷啓（1913）：トリューペル教育院を訪ふ，児童研究，16巻10号で報告．トリューパー治療教育院での治療教育については，Trüper，H．／Trüper，I．（1978）：Ursprünge der Heilpädagogik in Deutschland．Stuttgart．を参照．

25）当時の富士川の児童研究の視点については，富士川游（1907）：児童研究，児童研究，10巻7号，及び富士川游（1910）：児童研究の範囲，児童研究，13巻9号，を参照のこと．

26）ゴッダード研究所にいた川田は，1916年5月

三田谷宛書簡で，アメリカの治療教育の現状を顧みて我国での治療教育学研究の課題を述べている．

27）富士川游（1924）：異常児童，太陽堂，や富士川游（1927）：異常児童調査，広島修養院，等．

Zusammenfassung

Einführung der deutschen heilpädagogischen Forschung in Japan

Emiko Okada und Yuji Tsumagari

Betrachtet man die Forschungstendenz der deutschen Heilpädagogik in Japan, so nimmt die Forschung der Theoriengeschichte den größten Teil in Anspruch. Historische Forschungen über die Bedingungen zur wissenschaftlichen Systematisierung der Heilpädagogik und deren Umsetzung in die Praxis sind immer noch äußerst unzulänglich. Als ersten Schritt zur Überprüfung solch herkömmlicher Forschungsmethoden behandelt die vorliegende Arbeit den Bildungsprozeß der Forschungsbasis über die deutsche Heilpädagogik in Japan. Der Zeitraum wird auf die Zeit der Einführung der Heilpädagogik in Japan beschränkt und die wissenschaftliche Systematisierung der Heilpdagogik wird basierend auf den folgenden drei Bedingungen überprüft:

1. Errichtung eines Forschungs-Stammbaums mit den Zeiten und Namen der Forscher und der Gründung von Forschungsinstituten.
2. Organisation der Forschungsarbeiten und Publizierung der Forschungszeitschriften.
3. Anwendung der Heilpädagogik auf die Praxis.

Die heilpädagogische Forschung in Japan ist als Teil einer Reihe von Kinderforschungstätigkeiten entstanden, mit ihrer Systematisierung in den zwanziger und dreißiger Jahren der Meiji-Zeit. Es ist zu bemerken, daß sie durch die Einführung der Kinderpsychologie und der Experimentalpädagogik Anlässe zur Bildung einer Forschungsbasis geschaffen hat. Ein wissenschaftliche Systematisierung der Heilpädagogik in Japan fand jedoch hauptsächlich Unterstützung bei Ärzten, die ihre Studien in Deutschland absolviert haben, darunter vor allem Fachärzte der Psychiatrie.

Die heilpädagogische Forschung der Meiji-Zeit wurde jedoch im Schatten des Staatsschulenakademismus betrieben, wobei die Praxis der Heilpädagogik etwas im Hintergrund blieb. In dieser Situation haben Hiraku Sandaya und Yu Fujikawa mit der heilpädagogischen Forschung begonnen. Die heilpädagogischen Forschungen seit dem Jahre 38 der Meiji-Zeit bis zum Jahre 3 der Taisho-Zeit durch diese beiden Forscher war epochemachend, und hat die heilpädagogische Forschung aus den Kinderschuhen in die Ära der Entwicklung gehoben.

Schlüsselwort: heilpädagogik , Hiraku Sandaya , Yu Fujikawa , Shuzo Kure